
果てのケモノの散歩道

バイアティス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

果てのケモノの散歩道

【Nコード】

N0561U

【作者名】

バイアティス

【あらすじ】

ケモノさん（謎生物）が転生者（未遂）と神さま（美少女）と一緒に異世界にいく話し。

危険な事が何もない、むしろ異世界の方が危険です……な内容かと。

ケモノさんテンプレを壊す（前書き）

やっところさ時間取れたよ。

転生テンプレを壊したくなった。

東方はなるだけ早く再開したい……にしても酷い文章だぜ。

ケモノさんテンプレを壊す

最近巷（俗に言って神々とか）では 転生モノ ってジャンルが流行っているらしい。

なんでも下位の次元世界……その中でも田舎の惑星から、個体の不幸度合いが基準値を越えた生命体（何を基準にしているのかは知らない）を支援・援助するのが目的らしい。

まあ、それもあくまで名目上なんだけど。しかしそんな 転生が暇をもて余した神たちの間で大人気なんだとか。

力ばかり有ってもやること無くて暇してるから娯楽に飢えてるらしいね。 転生 させた生命体の人生を上から目線（態度的にも物理的にも）で眺めて楽しむのが良いそう。

覗き魔みたいでヨロシくない感じだけど、基本的には善意でやってるし、普通の生命体じゃあ一生を永劫繰り返しても手に入らないような 能力 をプレゼントしてるから文句は少ないみたいだね。

え？ ところでボクが何者かって？

別に気にする必要はないと思うし、知っても得する事は無いよ？ 実際ボクなんて大したことない存在だし。

ん〜でも知らない誰かにズラズラ解説だけ受けても面白くないのかな。

そうだなあ……じゃあボクが友達から呼ばれるあだ名で ケモノさん と呼びなよ。

それでいいよね？ 異論は認めないけど。

今日も今日とて暇神たちの遊びが行われている。　ほら、少し耳を澄ませば聞こえてくる。　転生予定者と神の会話が。

「テメえ……暇潰しのために俺を殺したってのか……　っざけんな！
」

「神は冗談を言いません。ゆえにふざけてもいません。貴方は私を楽しませる義務があるのです」

いきなり不穏な会話がされてるよ（汗）　たまにあるんだよねこんなこと。

ちよつとだけ気になってボクは百二十六個ある目を会話方向に向ける。見付けたのは二つの二足歩行。

一つは下位次元でよく見かける人間って種族の雄。外見からだとは多分まだ若い個体なんだろう。便宜上、彼を青年と呼んでおこう。
……あいにく人間の知り合いつてあんまり居なくて外見で歳の判別し辛くてね。青年は物凄い剣幕で怒鳴り散らしている。

もう一つは外見上は人間の雌……白の服装に白の翼を持つ個体だ。話の流れからして彼女が神か。まるで虫けらでも見るような目で青年を見下している。

「貴方は面白くない世界に、自分の人生にウンザリしていたのでし

よう？私はそんな貴方にチャンスを与えているのですよ？」

「誰が頼んだそんなこと！」

「生きていても世界に利をもたらない生命……貴方はそれです。そんな貴方に一生命としては破格の力と新しい人生を与えるのです。むしろ感謝してもらいたいですね」

「だからって勝手に殺されてたまるか！！」

「何が不満なのです？ 貴方は力と生を、私は貴方の生き足掻く姿を見る娯楽を。等価として十分でしょうに」

わお、こう言うのを修羅場って言うんだよね？相も変わらず神つてのは勝手だね。まあ基本人格がどれも自己中と言うか、唯我独尊なのばかりだからねえ。

会話からして青年は神に殺されて転生させられる真つ最中なんだろうね。本来なら事故死とか自殺とかした人間を主にしてるって聞いてたけど……まあ選ばれるのが基準値越えの不幸生命なんだから、しょうがないかな？（笑）

にしても、会話が堂々巡り。空振りしまくってループしてるよ。神も表面上はクールを装ってるけど、あれさ相当苛ついてるね。ボクには分かる……まあ彼女も若い神なんだろう。交渉に馴れてる感じじゃないね。

とか思ってたらずに神が動き出した。

「ともかく——神である私が決めたことです。諦めて転生なさい人間。これは、運命ですよ」

ループするばかりだった会話をばっさり切り捨てて、青年の転生先にするつもりだろう異次元世界へのゲートを開き始める。

短気は損気だつてのに……若いなあ。さて、肝心の青年はと——。

「……けんな」

「なんです？」

「運命だあ……そんなのが運命なら——んなもん俺がぶち壊してやる……！」

こちらも遂に感情を爆発させた青年。神に向かって殴りかかるべく腕を振りかぶる。

「愚かな……」

あ、駄目だ。死んだね青年。いやもう死んでるから表現がおかしいかな？

幾らか能力を与えられても下位次元の生命は上位の生命に勝てない。まあ青年はそんなこと知らないだろうけど、無謀だね。

「多少は痛いですが、殺しはしません。精々自らの愚かさを後悔しながら転生なさい——神威あれかし〃ジャステイス……！」

神の掌から光の塊が放たれる。それはまさに神の光の鉄槌だ。
光は雄々しく猛る青年を打ち据えるべく直進し、そして――
かき消された。

「……え」

散る光の雫を払い、青年は呆然とする神へと進撃し握り締めた拳を打ち放った……って、神の力を打ち消すって一体どんな能力を与えたのさ？

「うらああああああああっ！！！！」

「きゃあっ！？」

意識しなくても防御壁は出していたのだろう。一瞬だけ光の障壁が青年の拳を止め、しかしそれすらも先の鉄槌同様に破壊され光と散る。

あるんだねえ、まさかの青年、奇跡の逆転劇……まあ彼女のミスだろうなあ。転生前に能力上げたのも、青年の逆鱗に触ったのも。

「あ、ああ……」

「言っただろうがよ……ざけるなって……！」

あゝあ……彼女すっかり怯えちゃってるよ。あれだね端から見たら息荒くした不良に襲われた美少女？ まあ自業自得だけど（笑）

「人間舐めんなあつ!!」

「ひゃうつ…!」

へたりこむ神に再度拳を振り上げる青年……おいおい容赦無いなあ。

うーん、完全に完膚なきまでに彼女が悪いけど、流石に雌……もとい女性が殴られるのを黙って見てるのは、雄として間違ってるよね？

異論ある人、手挙げて——はいいませんね。いてもお話し進まないから助けるけど。それがケモノさんだよ。

じゃ、青年を止めますか。

視点・砂鮫・始

俺を暇潰しのためだけに殺し、勝手に能力とやらを付けて、あげくことん人を見下す自称・神。

確かに俺は駄目人間だ。自分で言っちゃあなんだがクズだろう。だが、だからって人を殺して道具扱いの奴に、神だからとか運命がどうたらで好き勝手やらされるのは勘弁ならねえ!

俺は神に殴りかかった。神はやたら眩しい光の玉みたいなのを撃ってきたが、当たる前に何故か消えた。

理由は知らねえ。だがチャンスだ。神に拳を打ち付けようとして、寸前に壁みたいなものに止められた気がするが、通り抜ける。

いま神は地面（や、地面っぱいなんかだが）にへたり込んでやがる。

女だからって容赦はしねえ……！

「人間舐めんなあつ……！」

「ひゃうつ……！」

拳は勢いのままに突き進み、神を捉えるその瞬間――

「雌……じゃない女性に殴りかかるもんじゃないよ青年？」

――目の前に現れた、バケモノに止められた。
無数の目玉と角と牙を持った、その六足の黒いバケモノに……。

視点・砂鯨・終

バケモノとは失礼な！ ケモノさんを間近で見えてなんて言

い草だい！

君たちもそう思うだろう！？ …… 思わない？ てか姿が解らない？

…… まったく仕方無いな。じゃあケモノさんの姿を青年の視界をジャックして教えてあげよう！

巨大な獣。一言で言えばそれがしつくりくる。

人間とは比べ物にならない、まるで一本一本が丸太のように太く逞しい獣脚が六本。

その表皮全面を覆う剣にも似た鋭利さと甲冑のごとき頑強さを想像させる黒い獣毛。

その頭部には捻くれた角が無数に生え、眼球は百を優に越え、顎は奈落の入り口すら生温く思える。

太古から語られる神をも喰らう神話の中の怪物…… きっとそうなのだろう。

…… どうだい？ 格好いいだろう？

こんなに格好いいボクをバケモノだなんて、どうかしてるよ人間って奴は！

君もそう思うだろうお嬢さん？

「あ、ああ…… なんで、最果ての獣が、こんなところに……」

君もかい……。

助けた娘さんに怯えられるって……ボクが人型だったらorzしてるね。

——ん？

「うああああああつ！！！！！」

青年が殴り掛かってきたよ。いや痛くもなないけどさ。

「や、やめなさい！ あれは私たちでどうにかなる次元の存在ではありません！ やめてえ……！！！」

「るっせえ！ 止めんなあつ！！！」

えーなんでボクが悪い扱いになってるわけ？

青年もなんでそんなに取り乱してるのさ。その顔はあれかい。まるで冒険序盤に隠しボスに遭遇したみたいなの……あ、別に間違っちゃいないか。

「だりゃあつ！！！」

や、しかし……青年が全然殴るのやめてくれません。足下で暑苦しく声を張り上げてます。拳が裂けるのも意図わずに、ひたすらに連打。

ちなみに擬音にすると——ぺしばしばふぶ、です。可愛らしいね音だけなら。

んゝ流石にいつまでもこれでは飽きるねボクも君も。
仕方無い……青年には少しだけ黙っててもらおうか。

そろゝつと前脚を振り上げて……はい、ぺち。

メギヤアツツツ……！！

……おや？

「がつ……！？」

「ゲ、ゲートが砕かれ……そんな……」

いやいや脆すぎなんですって。思わないよ普通、ぺちつて一撃で
壊れるものだなんて。

あ、ちなみに青年はさっきので吹っ飛んでいます。なんか血塗れ。
貧弱ボーイめ。

ヲオオオオオオオ——オオオン！！！！

遠吠えじゃないよ。

脆くも碎けて壊れてしまったかに思えた異世界へのゲート。

あの音はゲートが軋みながらも本来の機能を果たそうと動いているのだろう。

「引き、ずり込……まれ……!？」

「な、なんで私まで……いやあッ!？」

なんて言おう……暴走？ うん。これが一番しつくりくるね。
まるでブラックホールのように周囲の尽くを吸い込み始めるゲート。

そして当然の如くそれに飲まれ始める青年と神。

青年は本来あるべき因果……決められた運命のままに。神は己より更に上位の意味か、皮肉にも自身が造ったゲートに飲まれていく。

運命の喜劇とやらだろうか————って余裕発言かましてますが……
実はボクも引き摺られてたり(てへぺろ)

正直、何とでもなる程度だけど……まあなんだ。あれですよ。聞こえますでしょうか、あの阿鼻叫喚。

「ああああああ……!!？」

「いやああああ……!!？」

なんか声にエコーが掛かって——ゲートの向こうに落ちました。

あゝこれってケモノさんの責任？ マジで？ いやいや……。

なに？ ——見るなよそんな目で。見るなって……ねえ……。

……しつかないなあ。ケモノさんにも多少の罪悪感がありますよ。彼らのいく末しつかり見て来てあげますか！！

たまには散歩もいいしね！

ボクは勇ましく（自分で言うか？）脚を振り上げゲートへ向かい、自ら、その向こう側へと駆け抜ける。

後に残るはただの静寂。

こうして青年と神とケモノさんは異世界に逝くことになったとさ。まる。

……—べちいっ！！

「——！！！！？」
「」

あ、やべ。勢いついでに二人引いちゃった……めんごめんご（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0561u/>

果てのケモノの散歩道

2011年6月26日20時58分発行